

編集後記

編集後記

本事業「古事記学」の構築」は、平成二十五年度後期から二十六年度にわたって行われた「古事記」の学際的・国際的研究」を発展・継承する研究事業である。そのため前事業と同様に『古事記』を焦点とし、本学で展開してきた古典研究の成果を踏まえつつ、今日の研究状況に即した学際的・国際的な視点からの研究によって、本学独自の「古事記学」の構築を目指すものである。

本事業の中核をなすのは、定例研究会で行われる、『古事記』本文の校訂と研究発表である。本年度は五回の研究会が開催された（詳細については『研究開発推進センター研究紀要』第十号の彙報参照）。本年度の本文校訂の範囲は、『古事記』上巻の「黄泉国」から「みそぎ」までであったが、これらの範囲には、神の死や他界観、禊祓といった研究テーマがあり、研究会で

はそれぞれの専門分野の観点から『古事記』論が述べられた。それは本事業が目指す学際的研究の実践であり、研究会で展開した知見は、本書掲載の注釈の補注としてまとめられている。

本年度は、このような定例研究会の成果を踏まえつつ、『古事記』の国際的研究の充実を目指し、平成二十八年一月二十三日（土）に国際シンポジウム「葬送の神話―東アジアの他界観と『古事記』―」を開催した。シンポジウムには、中国少数民族（^ナ納西族）民族研究者である鮑江氏（中国社会科学学院社会学研究所・研究員）を中国より招聘し、現地の神話にまつわる基調講演をいただいた。講演の後には、鮑氏とは異なる中国少数民族（^バ白族）の研究者である立石謙次氏（東海大学文学部講師）と日本上代文学研究者である谷口雅博氏（國學院大学文学部准教授）のパネル発表があり、東アジア地域の民族がもつ他界観に焦点を当てて、中国少数民族の事例と『古事記』の神話を比較

検討するという試みがなされた。このシンポジウムの模様は、次号の『古事記学』に掲載予定である。

さて、『古事記学』第二号には本年度の活動成果として、『古事記』注釈と二本の論考、そして敷田年治『古事記標注』の翻刻を掲載した。『古事記』注釈については、前号よりも多くの補注が掲載されている。続く論考のうち遠藤論文は平田篤胤の他界観について論じたものであり、中村論文は国語学の見地から、『古事記』冒頭の「浮きし」について考察する。なお、『古事記標注』の翻刻は、本事業のポストドク研究員による研究成果であり、近代における『古事記』研究の再検証と位置づけられる活動である。

本事業には、國學院から幅広い年齢・分野の研究者が集っている。今後も『古事記』を中心とした学問の広がりを見せるように研究事業を推進していきたい。國學院大学の「古事記学」として認識されるよう努めていきたい。（渡邊）